

町長の
まち・ひと・しごと
魅力発信

～ 事業所訪問 vol.20 ～

「秩父デザート株式会社」

町内には、優れた技術を持った会社が多く存在します。事業所の持つ技術や魅力を町長自ら訪問して、目で見て、お話を伺い、住民に情報発信する「事業所訪問」を連載します。

町長の見て・聞いて・話して

第20回の事業所訪問は、9月12日に秩父デザート株式会社を訪問し、田畑和典社長にお話を伺いました。

秩父デザート株式会社は、秩父産の食材で手作りにこだわり、プリンやゼリーを製造している会社です。

平成15年(2003年)、オーディオ関連会社の空き工場を利用し、株式会社ワークス(人材派遣会社)を設立され、その後、食品加工を開始し、平成27年(2015年)に現在の社名に変更されました。

試行錯誤しながら、自社ブランドの夏場の商品として、人気商品の「秩父プリン」が開発されました。

案内していただいた工場では、秩父で育った素材を大切に商品づくりのもと、徹底した品質管理をし、安心安全な商品が製造されておりました。また、女性社員によるラッピングのリボンを結ぶ作業はとて密緻なものでした。こういった手作業にこだわっている可愛いラッピングパッケージこそがお客様を惹きつける要素であると感じました。

人気商品の「秩父プリン」は県内のパーキングエリア、



ラッピング作業を見守る森町長

道の駅、小売店等多数の店舗で販売されています。

常に商品化のアイデアを念頭に置き、秩父産にこだわり、手作りにこだわる企業信念のもと、地場産品を通じて、地域の活性化への架け橋を担う企業であると感じました。

わが社の主力商品

秩父産の素材をふんだんに使った「秩父プリン」は、当社の人気商品です。果物をひとつひとつ丁寧につぶし、ピューレにするところから手作りにこだわっておりますので、やさしくて暖かいスイーツに仕上がりに、多くの方々に召し上がっていただいております。

今年は大手百貨店の夏のギフト商品カタログの表紙を飾り、贈答品として全国各地へ配送され、「美味しい」というメッセージを多数いただきました。

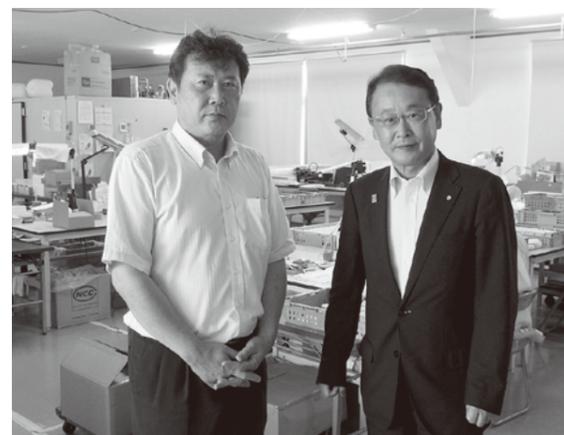
ここに自信あり

当社は秩父プリンのキャッピング、ラッピングまでひとつひとつ丁寧に手作業をしております。

ラッピングのひもは繊細な和紙でできているため、リボン結びは緻密な作業となりますが、最後まで手を抜かず、食べてくださる方の笑顔を思い浮かべながら、リボンを結んでおります。



▲▼人気商品の秩父プリン
上は果物を使用、下は借金なし大豆を使用しています。



田畑社長(左)

会社概要

代表者 代表取締役 田畑和典
従業員数 7名
創業 2003年
所在地 小鹿野町小鹿野2038
電話 0494-75-2211

こんにちは。
町長です。

「ほめて」育てることの大切さ



周辺の山々も紅葉となり、秋の深まりを感じる季節となりました。

さて、人を育てることや、より良い人間関係を築くことは我々社会で生きていくうえでとても大切なことだと思います。

このことを実現するうえで大変参考となる講演会が当町で

何回か開催されました。この講演会の講師は、一般社団法人日本ほめる達人協会理事長の西村貴好氏と、同協会特別認定講師である学校法人橘学園秩父ふたばこども園(秩父市)副理事長の根岸和美氏のお二人です。

西村理事長は、覆面調査会社を立ち上げ、飲食店やサービス業の経営者からの依頼を受け、問題点や改善点を探し出す仕事を行い、徹底的にダメ出しをしたとのこと。しかし、正しいことを証拠とともに伝えても結果は変わらず、瞬間的に改善されても次々と違う問題点が持ち上がる状態であったそうです。そこで、視点を変えてまったく逆の挑戦として、無理やりでも社員の「いいところ」を探して報告することにしたら、その「ほめられた」社員の業績が上がったそうです。

このような経験から、今できているところにスポットを当て、ほめて、認めることで人は驚くほど成長すること、また、目の前の人の成長を妨げてきたのは、マイナスのラベルを張っていた自分自身であることを学び、「ほめる達人」になる道を選んだとのこと。

一方、根岸さんは家庭の事情等により幼稚園の経営に参加することになり、その中で色々な経営上の悩みを抱えていたときに、同協会に出会い、学んだことで自分自身をほめる達人に変革させたとのこと。これを機に職員の意識も変わり、園を離職する職員もなく、現在は幼稚園からこども園に経営を衣替えして順調に進んでいると伺っています。

同協会が定義する「ほめる」とは、人などの「価値を発見して伝える」こと、ダイヤモンドでも周りの見えない暗闇では石ころと同じですが、明かりがついてその石ころがダイヤだと気づいた途端、そこに価値が生まれる。職場や家庭で、この明かりの役割を果たすのが「ほめる」ことだそうです。

価値を発見して伝えるのに必要なのは「観察力」と「変換力」そして「伝える力」であり、

- ・「マイナスをプラスに変換」することも価値の発見に役立つこと。
- ・「ほめる」とは理論や理屈ではなく実践こそすべてであること。
- ・「ほめ上手」になれる魔法のフレーズの3S『すごい!』『さすが!』『素晴らしい!』の3つを口癖にして反射的に使えるようにすること。

「言葉一つ」ですべてがうまく回り出す。これらのお話は、町役場職員の人材育成などにも生かせる内容であり、大変参考になりました。

小鹿野町長 森 真太郎

「小鹿野町政策審議会」
最終答申を行いました

小鹿野町政策審議会(小松征三会長)は、町長の意思決定に際して専門的な立場から特別な事項を調査・審議する合議制の機関として設置されました。

平成30年3月22日に「産業振興の活性化について」の諮問を受け、11回の会議を重ね、令和元年9月24日に町長へ、最終答申を行いました。

- この答申では、
- (1)地域経済活性化の中核拠点を目指す株式会社「地域商社おがの(仮称)」を設立すること。
 - (2)「地域商社おがの」のDMO※機能により観光振興へ取り組むこと。



の2点が示されました。

※DMOとは、多様な関係者と連携し、観光地域づくりを行う舵取り役となる法人のこと。

問合せ●小鹿野庁舎・総務課 ☎75-1221